

第8回 環境教育講演会 (M-cafe8)

子どもの力を見取り、引き出す授業

ー 特別支援教育におけるESD実践に学ぶ

谷 村 佳 則
遠 藤 晃

個を伸ばすためのエンパワメント

持続可能な社会を担う「人」を育てるESD (Education for sustainable development: 持続可能な開発のための教育) が世界中で取り組まれている。すでに学習指導要領にもその内容が取り入れられ、学校教育でもESDが推進されている。いまなぜESDなのか？

学習指導要領改訂に向け、2014年に文部科学省から中央教育審議会に出された諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では、新しい時代に必要な資質・能力の育成の取組例として、OECDが提唱するキー・コンピテンシー育成や論理的思考力や表現力・探究心等を備えた人間育成を目指す国際バカロレア・カリキュラムと並び、ユネスコが提唱するESDが示された。これらの取組みに共通の視点は、基礎的な知識・技能の習得と活用、自らの課題発見と主体的・協働的な探究、表現、社会との関わりで、これまでとは異なる教員の役割が求められることとなる。

第8回 環境教育講演会 (M-cafe8) では、本学の谷村佳則准教授が、前任校の岩手大学教育学部附属特別支援学校において研究主任として実践した、中学部生活単元学習「きれいにしよう！蝶ヶ森～花壇をつくろう～」という単元例を核にした研究事例を、「特別支援教育におけるESDの指導実践」というテーマで講演した。本報告はその講演内容を記録したものである。

特別支援教育における「生活単元学習」の授業では、個別のニーズを探り出し、児童生徒が社会の中で主体的に持てる力を十分に発揮できる学びの場を創り出すことが学習支援の中心となる。

体育の時間にミニ登山として子どもたちが日常的に登る「蝶ヶ森」。雨が降ったらぬかるむ蝶ヶ森の山頂が「もっときれいだったらいいよな」という子どもたちの声。教員はこの声に気づき、拾いあげ、エンパワメントしながら、「みんなの力で蝶ヶ森を美しく整備していきたいな」、「そうだよ。花があったらいいんだよね。きれいになるよね」という声へと高めていく。こうして高まった声が大人を動かし、地域や行政、そして家庭と一体となった子どもたちの花壇づくりが始まる。一度動き始めた子どもたちは、留まる事無く次から次へと課題を解決していく。その生き生きとした姿に、実はおとな達の方がエンパワメントされていることに気付く。

今回の参加者は、小学校教諭、社会福祉法人職員、本学教員、そして学生たちと多数であったが、それぞれが、特別支援教育において「エンパワメント」をキーワードに展開された「個々の力を最大限に発揮していくための環境づくりと支援」の中に、すでにESDの要素がすべて備わっていることを認識することとなった。これが今後、参加者の個々の取り組みの中にESDの要素がすでに自然な形で存在していることへの気づきを促す、あるいはESDを手段（ツール）に教育への取り組みを構築・再構築することに繋がればと思う。

遠藤 晃（南九州大学・人間発達学部）

子どもの力を見取り、引き出す授業

～特別支援教育におけるESD実践に学ぶ～

谷村 佳則（南九州大学・人間発達学部）

今日のテーマは「特別支援教育におけるESDの指導実践」です。私の研究は授業実践をベースにしていますので、生活単元学習における花壇作りを通しての現場での実践のほうから、皆さんにお話ししていきたいと思います。よろしくお願いします。

今回のお話は3つに分けて進めていきます。まず始めに、特別支援教育の対象はさまざまな障害を持った子どもたちです。ですから、皆さんに障害者とはどんな存在なのか、その中でも、知的障害の子どもたちの学習にはどんな特性があるのか、それを押さえていただくためにこのお話をしたいと思います。次に、2つ目。今回のテーマであるESD、これと特別支援教育との関連はどうなのか、教育上、どうつながっているか、これをお話しします。そして、3番目。「ESDの指導実践例から」ということで、私が勤めた前任校の研究を紹介し、その中で行ってきた中学部の生活単元学習の実践、これをお話しします。

では始めに「障害者とは」ということで、これはアメリカの心理学者マズローが提示した「欲求の5段階説」という図です。ピラミッド型の底辺から頂点まで、5つの層に分かれています。一番下の欲求を見ると、「生理的な欲求」。寝たいな、食べたいな。次が「安全の欲求」。安全な場所に住みたいな。そこで食べ物を食べて生きていきたいな。これらは「基本欲求」というんですよ。生きていく上で欠かせない欲求なんです。その場所、どこだか分かりますか。皆さんが育ってきた家庭です。家庭の中で保護者である養育者に育てられる、これが「基本欲求」です。それが満たされると、次の欲求、「所属の愛の欲求」。集団の中で、家庭の中で、学校の中で、地域の中で、働いたら職場の中で、みんなと仲良くやっていきたいな。さらにその上は「承認と自尊心」に移ります。その集団の中で認められたい。「君は頑張っているね」、「大切な存在だよ」、そう認められたい。こ

こまでが「欠乏欲求」って言うんですよ。欠かせない欲求。何に欠かせないかというと、頂点にある「自己実現」なんです。自己実現というのは、自分の夢や希望に向かって、それを成し遂げよう、やってみたい、チャレンジする気持ちなんです。皆さんもそうですよね。学生の皆さんは、教員になりたい、または環境園芸学部であれば、園芸人になりたい、そういう夢を持ってこの大学に入ってきました。「これをかなえたいよ」というのが、自己実現の欲求なんです。そこで自分自身の存在感が出るわけです。

なぜ、そのお話をしたかということ、この5段階説が言っているのは、言葉で言うと、「人は自己実現に向かって成長する生き物であり、自己実現に喜びを感じる」。皆さんもそうじゃないですか。私も「大学の教員になりたいな」と思って、単身赴任で、家族には迷惑かけてますが、こちらにきています。自己実現の欲求を満たそうと思って来たわけです。

そして、「基本欲求」。一番下にある2つの欲求ですね。これは「家庭」だよと言いましたが、それはよく安全基地と言われます。子どもが安心して暮らすための場所、安全基地。ここが欠けていると、子どもたちは愛着障害というものになります。つまり、虐待を受ける、ネグレクト、養育を放棄される、そうすると、もうその段階で、上への欲求を満たそうなんて思わなくなっちゃうんです。つまり、「みんなと仲良くやりたい」、「いや、あいつのこといじめてやろう」、「いじめ返してやる」、「認められたい」、「いや、認められなくてもいい。俺は一人で生きていくんだ」。そんなふうになっちゃうんですね。ですから、まずはこの安全基地を持つことが非常に大切です。そして、下位の欲求が充足されないと、満足できないと、上の欲求は起きてこないんです。ですから、自己実現の欲求は果たせないことになります。

これを障害者に当てはめてみましょう。そうすると、障害者の多くは、否定されて育ってきていることが多いんです。なぜか分かりますか。「やっと授かった子どもだ」。大切に育てますよね。でも、1歳になった。1歳であれば、普通、一人立ちができるんです。立てる。「あれ、まだ

立てない。どうしたんだろう?」。2歳。1人歩きます。「歩けない」。ますます不安になりますよね。で、3歳。片言の会話ができます。「まだお話もできない」。そうすると、母親っていうのは、「こんなこともできないの?」、「なんでできないの?」。そして、周りのできてる子と比べちゃうんです。「隣の何々ちゃんはあるのにね」。最後はダメ出しです。「やっぱり、お前はダメだね」。「うちの子じゃないんじゃないか?」って言いたいんです。こんなこと、子ども、言われたら、どうですか?「自分を大切にしよう」、「頑張っていこう」という気持ちなんて起きませんね。ましてや、ここです。褒められた経験が非常に少ないんですよ。声をかけてもらえる、「頑張ってるね」、「すごいね」、「よくできたね」って、なかなか言われない。やっとなんて、今頃できたの?」、「やっとなん?」、そんなふうに言われます。「よくできるようになったね」なんて、なかなか言われません。比べちゃうからなんですよ。そうすると、障害者の多くは自尊心、自尊感情、自分を大切に、そういった気持ちが欠落しています。これは、つまりは、自己実現の動機づけが欠けているということなんです。「何かをやってみよう」、「挑戦しよう」という気持ちが、その段階でもう起こらないんです。これが一般的な障害者の姿です。

そこで、その中から知的障害の子どもたちを取り上げて、では学習していく上でどんな特性があるのかということなんです。これは学習指導要領の中にきちんと明記されています。今回の学習指導要領の中の解説、総則等編の中に、4つ示されています。

1つ目。習得した知識や技能が片寄っている。断片的。実際の生活に応用されにくい傾向がありますよということです。どんな意味合いかなという、それは私なりの解釈なんです。こうです。つまり、好きな勉強と嫌いな勉強が非常にはっきりしているんですよ。「体を動かす体育、音楽が好きだ。でも、国語、算数は嫌いみたいだ」。あとは、一部の内容。「音楽は好き。でも、歌だけだよ。楽器の演奏は嫌いだ」、こういった傾向があります。

そして、覚えたことを生活の中で一般化できないんです。その一例として、金銭種を覚えやすい。1円玉、5円玉、10円玉。やっと見分けがつくようになった。そして、「100円玉は10円玉10枚だよ」というのが分かるようになった。「ああ、じゃあ、もうお金数えられるから、買い物学習をしましょうね」と言ってお店屋さんに行くと、買い物ができない。分かんないですよ。つまり、生活で応用できない。

2つ目。成功経験が少ない。このことで、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていない。これが、この前に話した「否定的にいつも育っている」と、その裏返しです。「頑張った」、「できたね」という成功体験が与えられないんです。ですから、いつも失敗経験ですよ。自信がない。自信がないと、新しい学習に対して「取り組んでみよう」という動機づけも生まれません。むしろ、「やりたくない」となります。ですから、消極的、逃避的な学習態度になってしまいます。

3つ目、4つ目です。実際の経験が不足しがち。抽象的な指導内容よりは、実際の、具体的な内容が習得されやすい。どうなのか分かりますよね。さっきのお金の学習です。教室で1円、10円、100円とお金を数えるよりも、もう、すぐに買い物学習をして、お店屋さんに行って、お金の出し入れを学んだほうが、子どもたちは体験的に覚えやすいんです。ですから、実際の場で、実際の生活の中で学習しよう、これが大切なんです。ですから、学習で使う用具も、よく絵カードがありますよね。さらには写真カードなんかもありますよね。そうではなくて、「本物を使いましょう」ということなんです。つまりは、半具体物よりは具体物、具体物よりは実物、それを使って学習したほうが、子どもたちは頭の中にも入るし、身に付くんです。これらが、学習上の特性として明記されています。ですから、学習指導要領は非常に大切なんですよ。見ていくと、「なるほどな」というのがいっぱい書いてあります。ですから、教師はそれを頭の中に入れて指導しなければいけません。

さらに、こんなことが書いてあります。「知的障害児の特性に応じた教育的対応の基本10のボ

イント」。指導に当たっては、これらを頭に入れながら指導しなさいねと。この中で3番目、5番目、次の6番目、8番目は、今言った4つの特性に直結してますよね。例えば6番目「生活経験を通して学びましょう」。8番目「成功体験を多くしましょう」。「できたね」という体験をいっぱい積みませしょう。そして、自主的、自発的、主体的な活動へと発展させていきましょう。そういうことなんです。

なので、これらを頭に入れながら、今度はESDと特別支援教育との関連性、教育のつながりを見ていきたいと思います。22年間、私、特別支援学校に勤務したわけです。そのうち7年間ほど、岩手大学の教育学部附属特別支援学校に勤めました。附属特別支援学校というのは2つの意味があって、1つは研究実践なんです。研究の発信校として学校公開をして、リーダー的な存在にならなければいけない。2つ目は、教員を目指す学生の教育実習。ですから、私は結構研究のほうには取り組んできたんです。その中で、これら、「ニーズ教育」、「キャリア教育」、「インクルーシブ教育」、これが世界の潮流の中で日本に導入されて、日本でも取り組んできた教育なんです。特別支援教育もこれに取り組んできました。私も研究の中で何度もテーマに入れて、これ、やってきています。

これ、みんな、カタカナ用語ですよ。なぜカタカナか、分かりますか？実は、日本語に直訳すると、本来の教育の意味とは違って来るから、英語表記をカタカナの言葉に直して記したものなんです。「ニーズ教育」、直訳すると「必要教育」。「キャリア教育」、「職業経験教育」または「技能経験教育」。「インクルーシブ教育」、「包括力」、「包み込む教育」。これで分かりますか？本来の意味はそうじゃないんですよ。ですから、ちょっとごまかしなんです。カタカナで表記しているんです。

でも、これについても、特別支援教育はきちんと指導理論を構築して、実践を進めています。私も進めてきました。けども、ESD……。さっき、遠藤先生のほうから、「ESDというのは10年」ってありましたよね。今年で10年目が終わるんで

すけれども、その頃、私は附属特別支援学校にいました。研究を主体的にやっていました。でも、ESDという言葉は、ほとんど聞かれなかったです。あまり資料も見えていませんでした。

なんで浸透していないんだろう、その根拠なんです、これですね。ユネスコがESDの推進拠点校として「ユネスコスクール」というのをつくっていて、今年（2014年）の4月1日現在で、全国に705校あります。数を見てください。特別支援学校、たったの2校です。小学校、一番多くて364校です。「特別支援学校は学校数が少ないからじゃないのか」と思うかもしれませんね。割合で計算してみました。特別支援学校は、全国に1080校ほどあります。ということは、割合から言えば0.18%なんです、2校というのは。小学校、全国に2万校あります。そのうちの364校ということは、約1.8%。やっぱり、10分の1しかないですよ、割合として。ですから、発信されていないんです。なので、伝わらない。「じゃあ、遅れてるのかな」と思いますよね。でも、違うんですね。実は、特別支援教育では、すでにESDの考え方、学び方は取り入れて実践してきています。それがこれなんですけれども、特別支援教育では、子どもたちが知的な障害がありますね。ですから、発達未分化なんです。そういった子どもたちに、「教科の指導だよ」と言って系統的に学習をしていくと、なかなか覚えにくいんです。それよりも、教科ごとにやるよりも、教科を合わせてやったほうが、つまり、総合的にやったほうが、生活にも結び付けられて覚えやすい。そこで、ここにあるような「領域・教科を合わせた指導」、つまり、「教科別だよ」、「領域別だよ」と分けない指導があったんですね。昔からあるんです。

教育課程の図を見ると、指導内容としては、各教科、道徳、特別活動。これは小学校も中学校もありますよね。そして、これは自立活動というのがあるんですが、これを2つに分けてるんです。1つは、教科別・領域別の指導だよということ、教科別の指導は小中と同じように、国語だ、算数や社会だ、体育だ、音楽だってあるんです。それから、領域別の指導には道徳、特別活動とかあります。それとは別に、合わせた指導というのがあ

るんですよ。作業学習、生活単元学習、遊びの指導、日常生活の指導。聞き慣れないでしょ？でも、これを大切にしています。特に、「生活単元学習」は、小学部、中学部、高等部、全ての学部で学習しています。なので、この「生活単元学習」に少し着目してみたいと思います。

知的障害教育では、生活に結び付けた実践的で具体的な学習を活動の中心に据えるんです。つまり、実際、生活の中でもやれる、やる場面を想定して指導するんです。これを通して、主体的に取り組む力を育てる。これが狙いです。そして、生活単元学習は、これです。つまり、子どもたちが自分の生活上の目標や課題、それを見つけて、それを達成に向けて解決していく、その一連の活動が「合わせた指導」なんです。例えば、買い物学習だったら、お金を数える。「算数」でしょ？お屋さんに行って、店員さんと会話をする。「社会的な学習」ですよ。そして、学校に戻って、何を買ったかメモしたりする。「国語的な学習」でしょ？一連の活動が組織的に経験できるんです。それが自立的な生活に結び付く、これが「生活単元学習」なんです。ESDに近いですよ。

なので、最後の図がこれです。関連性を矢印、下線部、色で表してみます。ESDの学び方、教え方、これ、ユネスコのほうで3点提示しているんです。一番目。問題解決能力の育成だよ。具体的な行動だよ。それを一連の流れの中に位置づけるんだよ。右見てください。課題解決。一連の活動を組織。生活単元学習の中にあるでしょ。二つ目。体験、体感重視。参加型のアプローチ。これは経験、そして、実際に総合的に学習。これに当たります。そして三つ目、自発的な行動。主体的に取り組む力。非常に関連性がありますよね。

ですから、結論から言えば、特別支援教育の中にESDは浸透していません。「ESDだよ」と構えて実践は特にはしていませんが、でも、もうすでにやっている教育なんです。小学校、中学校、高校は「ESD教育」というので、大々的に総合的な学習の時間の中でやっているんですが、特別支援教育では「合わせた指導」の中で、それぞれやってきています。

さあ、そこでいよいよ三番目。「ESDの指導実

践例から」ということで、写真を踏まえて紹介していきます。まず、私の前任校での研究はどんなのだったのかというのを紹介します。さっきも言ったように、7年間ほど岩手大学の教育学部附属特別支援学校に勤めていました。赴任してすぐに研究主任になったんです。普通は、新しく来た者を研究主任にはしないんですよ。いや、私も驚いたんですね。そして、赴任の初日に学校長から呼ばれました。附属校の学校長というのは、大学の教授なんです。校長室に呼ばれて、「実は、うちの附属校は最近、公開に人が集まらなくなった」。学校公開。「どうも魅力の感じられるような研究内容じゃない。附属校であれば、研究をどんどん推進していったって、全国に発信できるような魅力のある研究をしなくちゃいけないんだ。それを、君の力でもう一度、立て直してほしい」と言われたんですね。いや、すごいプレッシャーなんですよ。ただでさえ、すぐに研究主任になって、そんな命題があったのかと。さらに、今までは2年ごとの研究をやって、2年目には学校公開研究会をやった。それを、3年に変えと言われた。つまり、じっくりと研究の理論をつくって、理論を構築して、それを土台に実践に進めてほしいと。ですから、「まだ研究テーマもつくってないんだよ」と言われたんです。「えー？」と、驚きました。普通、研究テーマというのは、前年度の末にはもうすでにつくっておいて、引き継いで、そこからスタートしていくんです。ところが、「一からやり直しなので、テーマもつくってないから、そこからやってくれよ」と言われたんです。そのプレッシャーの中で、「どうしようか、どうしようか」と思いながらもやってきたんです。「5月の終わりまでにはテーマをつくり終えて、大体、研究の体制を整えてほしい」と。

それから、本当に必死になって、各学校の研究紀要とか、研究雑誌、論文を読みました。そこで引っ掛かった言葉があったんです。それが、ここにある「エンパワメント」という言葉なんです。聞いたことありますか？福祉関係の方は分かっているとと思うんですが、教育関係の方にはなかなか馴染みのない言葉なんです。私も、「あれ、これはなんだろうな？」と思って、初めて読みました。

そうしたら、「これは素晴らしいな」と思ったんです。なぜかという、「エンパワメント」というのは、もともとはアメリカの人種主義の中から黒人が差別化されてますよね。それを平等主義の人権運動の中で唱えられた言葉なんです。つまり、黒人はもともと力がある存在でもあるんだけれども、その力を発揮できない状態にもあるんだ、差別されて。それを、「もともとある力をどんどん発揮させていきましょうよ」、つまり、「エンパワーしていこう」と。「エンパワー」というのは、直訳すると「力をつける」、「力を与える」ということです。ですから、もともとある力を引き出していく、それが「エンパワメント」だと。これが福祉の分野だけでなく、これからは教育、医療、労働の分野でも大切な言葉になるよということが書かれてたんですよ。「これはいいな」と思って、これをキーワードにテーマをつくりました。それがこれです。「個々の相違的ニーズに応え、社会生活力を育み、支援していくための授業実践」。そこに、「エンパワメントを生かした授業づくりを通して」という副題を付けました。はじめは、職員会でもブーブー言われたんです。これを提案するに当たって、なかなか理解してもらえませんでした。「社会福祉の分野を教育の中に入れると、かえって参観者が少なくなるでしょ」、「異質な感じがして、見に来なくなるんじゃないですか」、「違和感があります」。私のほうで丁寧に、「エンパワメントとはこういったことを指すんだ」と、理論を構築した資料を渡して、何度も何度も説明したんです。そこで賛同を得て、このテーマに決定したんです。その中で、「エンパワメント」をこうとらえたんです。「個々の力を最大限に発揮していくための環境づくりと支援の展開」。分かりますか？ 障害を持った子どもたち、やれる力があっても、なかなかそれが発揮できない。発揮できるような状況にない。それを、状況をつくる、つまり、環境をつくって、我々が支援していきましょうということなんです。

こんな感じでテーマをつくったんです。で、実践をしてきたんですが、次のこれ。これなんですけれども、これは昨年度、初めて気づいたんです。私がこのMCafeに昨年度から参加させても

らって、初めてESDという言葉、そして、その中身を知ったんですが、それで本を読んでいたら、こんなことが書かれていたんですね。ユネスコがESDの10年の時に出した言葉なんです、「ESDが全体として目指すのは、積極的な環境的及び社会的な変革を実践するために、参加型、行動志向型のアプローチを伴いながら、市民をエンパワーすることである」と書いてあります。「エンパワー」が使われているんですね。「なんだ、私が」、これ、平成17年ですよ、実践。平成17年というのは2005年です。「これを知らずとも、もうやっていたんだな。つながっていたんだな」というのを、改めて感じました。

それから、さっきのエンパワメントの中に、「環境づくり」とありましたね。これは非常に大切なんです。ですから、これも言葉に入れました。なぜかという、WHO、世界保健機関が2001年に、これまでの障害者の古い概念を改め直したんです。以前、ICIDHというちょっと難しい略語なんですけれども、そこでは国際障害者分類というのがあるんですが、障害をこうとらえていたんですね。「社会の中でハンディキャップを受けているのは、あなたに障害があるからだよ」、そういった障害のとらえ方をしていた。分かりますか？ つまり、脳性まひという障害がある。脳性まひだよ。足の機能が不全。機能不全になる。そうすると、能力不全。歩けません。歩けないから車いすを使う。移動できます。でも、階段やスロープは通れません。上がれません。ハンディキャップ。ですから、元に戻って、「あなたに障害があるからでしょ」となったのです。「ハンディキャップは障害のせいだよ」と、マイナス的な見方をしていたんです。それが改められて、こうなったんです。見てください。この矢印に注目してほしいんですが、相互方向の矢印ですよ、ここ。全てが皆、関連してるんです。つまり、「障害者がこれから社会の中で活動、参加していくためには、その周りのいろいろな状況と環境の中で相関的に見ていかなければいけませんよ」ということなんです。注目してほしいのはこれ、「環境因子」なんですよ。これが入ったんです。つまり、環境を改善すれば、活動の参加もで

きますよと。環境条件の改善が重要事項となってきました。なので、これもエンパワメントの中に私は入れたんです。ここね。環境整備と書いてます。それで、このような環境づくりの図を提示しました。これは、まず、子どもたちは学習の主体者なんだ。ですから、中心に置きます。子どもたちが中心に回るんです。その取り巻くものの大きなところとして、「社会的な環境」があります。学校、家庭、周辺地域、その中の人たち、物、社会的な資源。そして、そこでの習慣とかルール、マナー。それらが「社会的な環境」なんです。その中に「人的な環境」と「物理的な環境」がありますよ。「人的な環境」というのは、支援者、教師、保護者、または市役所の人。または、直接的に支援しなくても、周りにお店屋さんがありますよね。お店屋さんの人とか、そういった方も入ります。「物理的な環境」というのは、学習の場、教材教具、そういったものです。ですから、これらの環境をしっかりと整えてつくっていきましょうよということで、この図を提示しました。なので、この環境づくりの中の実践を次に見ていきます。

これです。「中学部生活単元学習の実践」。「きれいにしよう！蝶ヶ森～花壇をつくろう～」という単元例です。この中の蝶ヶ森、これは何かというと、附属特別支援学校の東側のすぐ近くに小高い山があるんです。その山を蝶ヶ森と言います。標高が229メートル。歩いて約30分ほどで、展望台のある頂上まで行けます。でも、そこに行くと、見てください、盛岡市内が一望できるんです。非常に景色のいい、眺めのいい山なんです。そこに子どもたちが体育の時間に、「ミニ登山」という形でよく登っていたんです。途中、りんご畑の中を通るんですよ。非常に気持ちいいんです。そこを登って頂上の展望台を目指し、ちょっと速足で25分程度。ですから、学習時間の中で、行って、降りて、学校に戻ってこれるんですよ。ですから、体育の時間で、「ミニ登山」という学習で入れました。

その中で、子どもたちがよくこんなことを言っていたんです。「もっときれいだったらいいよな」。この周りは特に、雨の降った日なんて行くと、靴底がグチャグチャになって歩きにくいんですよ。

で、意外と殺風景なんです。こういうことを見て、子どもたちは感じてたんですね。「きれいだったらいいのにな」。実は、これは安庭地区、これは附属の学校のある地区は安庭地区と言うんですが、そこの町内会の方からも、市役所に「整備してもらえませんか」って、要望書を出してたんです。ところが、なかなか聞き入れてもらえなかった。それで、教師のほうから生徒に、「実はね、町内会のみんなもここをきれいにしたいと思って市役所に声を出しているんだよ」っていうことを伝えたんです。そうしたら、子どもたちが言ったんですね。「みんなの力で蝶ヶ森を美しく整備していきたいな」、「そうだよ。花があったらいいんだよね。きれいになるよね」という声、これが高まって出されてきたんです。我々教師は、放っておけませんよね。「お、そうだよ。先生もそう思ってたよ」。共感。共感してあげなくちゃいけないですよ。ここで否定しちゃダメなんです。「無理だ、無理だ。みんなじゃできないよ」。だって、成功体験を積ませていくんでしょ？「そうだ。いいこと考えたね」。そして、これを町内会長さんに伝えたんです。「子どもたちもきれいにしたいと思っています。なんとかもう一度、働きかけてもらえませんか」。そしたら、子どもたちの声があったというので、市役所が動いたんです。整備の許可が出されました。つまり、こうです。社会的な環境がここで整ったということです。学校、家庭、町内会、市役所が一体となって「整備しよう」という方向に進んだんです。つまりは、課題解決に向けた一体感が生まれました。ここですよ。これが「四者が一緒になってやるんだよ」という一体感です。そして、取り組みが始まったんです。

「一体感を持ちながら、グループに分かれての活動」と書きましたが、この一体感はグループの中だけの一体感じゃありません。さっき言ったように、学校を通り越えて町内会の方との一体感、市役所の方との一体感、家に帰れば家庭との一体感です。そして活動したんですが、まずは「杭づくりグループ」。これは何かというと、花壇を作るので、花壇杭を作ります。こういった丸太の棒を切って、5本連結して、花壇の枠取りにするん

です。この作業を、作業学習の中の「木工班」というところがやります。「木工班」というのは、木工作業をして、製品を作って、それを販売する、そういった一連の流れをする活動班があるんです。ここの子どもたちがやるんですよ。そして、「花壇作りグループ」。これが、切ったものをここに連結した花壇作りなんですね。これを頂上に持って行って、それを枠に並べて、形を作っておく。そして、土も掘り起こして、苗の植えられるような苗床に花植えをする。そして、「柵作りグループ」。周りに柵をはりめぐらす。この3つのグループに分けて活動が始まりました。

この中で、「杭作りグループ」に注目してほしいんですが、ここで物理的な環境の整備、行われています。これは学校の作業室で行う活動なんです、こんな感じで、子どもたちが活動しやすい場の設定をします。つまりは、動きの動線を考えて配置するんです。作業台、材料、子どもたちの立ち位置、そして、流れ作業ができるような動線。そして、教材教具の工夫です。子どもたち、いろいろ持っています。のこぎり。これは研磨機なんです。研磨剤。ほかにもこういった電動ドリルで止める。そして、いろいろな工具が使われるんですが、「よく使えるね」ということなんですが、その前にこれだ、その前にこれだ。またはこれね。電動ドリルで止める。そして、止めたここの連結のやつに防腐剤を付ける。こういった作業が行われるんです。

さっきののこぎりの話に戻りますが、普通、「障害を持った子どもたちが、こういった材料を使えるわけ、ないでしょ？」と思うでしょ。のこぎり、大人でもなかなか真っ直ぐ引くの、難しいですよ。ましてや電動のこぎりとか電動ドリル。でも、使えるんですよ。使うために、使えるようにするために、我々が補助具というのを付けるんです。補助具というのは、与えた教材教具が操作しやすいようにするものなんです。ですから、のこぎりを例にとると、これは手動ののこぎりなんですが、木で引く枠を固めるんです。つまり、この中を引けばいいように、木でこの枠を作っちゃうんです。そうすると、のこぎりをそこにさして、あとは引いて押すだけなんです。こういったガイドライン

を付けたり。そしてこちら、電動のこぎり。すごいでしょ、この子どものやる気のある顔。アクリル板でスライドしやすいように、ガイドラインを付けてあげてます。それだけで、電動のこぎりをただ操作するだけなんです。上、下、上、下と。力いりません。これができると、喜んでこんな顔になっちゃうんです。

そして、さっきの「杭作りグループ」の子どもたちは、ただつくるだけじゃないんです。つくるための材料の購入に、近くの店に買い物に行きます。地域資源の、社会資源の活用なんです。つまり、自分たちが作る上で必要なちょっとした材料を買うことによって、生き生きと買い物に行くんです。「これが足りなくなったから買い物に行こうよね」。これも目的意識です。そして、ここでお店の人も関わりを持ちます。お店の人も「何つくってるの?」と聞きます。「花壇」、「花壇」。「へえ、花壇。どこに作るの?」。「蝶ヶ森」、「蝶ヶ森」。「へえ、行ってみようかな」、つながりができるんですよ。

そして、さらにここです。「杭作りグループ」が作った杭は、体育の時間、ミニ登山の時に、山にせっせ、せっせとみんなで運ぶんですよ。運ぶと、その途中、途中で地域の人に会うんですね。会うと、声掛けをしてもらえる。「ほお、今日はこんなに作ったのか。頑張って持ってけな」、「はい、頑張ります」。一生懸命、重いんですよ、これ。持って、山まで歩いていくんです。そうすると、地域の方も頑張りを認めてくれて、協力してもらえるようになるんです。「杭作りグループ」の子ども、下でばかり作っているから、上でどんなふうにできてるのか分かりませんよね。これを入れることによって、「わあ、もうこんなにできたの」と、見通すことができる。見通すと、自分には下に戻って、「また頑張って作るぞ」というふうになるんです。

次に、「人的環境の整備」ですが、まずは市役所の方々にも関わる。子どもたちの声掛けもあって、やっと市役所が動きましたね。動いたら、市役所は早いんです。「何か必要な材料はありませんか」、すぐに声を出すんです。「花壇作りをしているので、丸太の棒とか板がほしいです」。「分か

りました。すぐに用意して送ります」。材料の提供です。さらに、子どもたちが「これから作りますよ」という起工式をした時に、来てくれました。で、「頑張ってください」と。その時に、恥ずかしそうにこう言ったんですよ。「本当は私たちがやらなければいけない仕事です。みんなにやらせてしまってすみません。でも、素敵な花壇を作ってください」、そう言ったんです。子どもたち、うれしそうに聞いている。だけれども、ちょっと分かんない子どももいるんですが、でも、「来てくれた」。うれしいんですよ。

そして、町内会の方々の関わり。この右にいる方、会長さんです。何度も足を運んで、子どもと一緒に作業してくれました。これは子どもたちが掘り起こした土。当然、石とか草とかありますよね。会長さんと一緒にふるって、いい土にしているんですよ。こんな感じで、町内会の方が1人じゃない、2人も3人も来て、一緒に活動に参加してくれました。一体感です。うれしいんですよ。会長さんにもこやかな顔で仕事してますよね。

あともう一つ。家庭との関わり。図はないんですけども、資料として後ろのほうに付けました。『きれいにしよう 蝶ヶ森通信』というのがあるはずです。ありますか？実は、これは2週間の活動期間に、保護者宛てに、「今、こんなような活動をして、ここまで進めますよ」ということで、学校の通信を出したんです。それを保護者が受け取ると、よく見てくれて、最後に「家庭からの欄」に書いて返してくれるんですよ。いろんな言葉があります。「うちの子どもがこんな活動してるんですね。びっくりしました」「こんなことができるようになったんですね。家で褒めてあげたいと思います」。そうすると、家に帰ると子どもが褒められるんですよ。ますますやる気になりますよね。自己実現に向けて、動機づけがさらに高まるんです。

最後に、最終号を見てください。最終号の言葉。「でも、この単元の成功は、生徒一人一人の頑張りです。主役なんです。主体です。私たち中学校の職員は、日々、生徒一人一人が頑張っている姿を見ながら、『がんばってるな』、『偉いよな』と語っています。私たち教員に『よし、頑張ろう』

と力を与えてくれているのは生徒たちです」。分かりますか？私たちが研究の中でエンパワメントをやっているんですが、逆に、我々がエンパワメントされているんです。それほど子どもたちの力というのは、潜在能力が高いんですよ。

そして、最後に、花壇の枠ができました。2つ作りました。そこに、花の苗を植えて。実は、この花の苗は、作業学習の園芸班が種から育てた花の苗なんです。自分たちで育てたものを持って行って植えたんです。クローバーの種をまく。これは子どもたちのアイデアなんですよ。花壇2つ作ったんですが、その間、ちょっと殺風景なんです。ですから、「ここに緑がほしい」、「もっと緑だったらいいな」ということで、「何か植えたい」。子どもたちはクローバー。やっぱり、あるんですね。見ているんですよ。で、クローバーの種をまいて完成です。

見てください。左側の写真。市役所の方、町内会の方、学校の校長先生、大学教授も来てくれるんですよ。で、みんなで記念撮影です。うれしそうな子どもたちの顔。そして、出来上がった花壇。八角形。若干、いびつなんですけれども、とてもいいものができました。そして、みんなで達成感、満足感、味わってきたんです。実は、この完成式が終わったあとに、子どもたちからまたこんな声が出てきます。花壇を増やそう。展望台を塗装しよう。「パート2?」。「え?」と思いました。「もっと花壇があればいいな」。で、展望台を見て「汚い」、「きれいにしたい」。新たな自己実現、課題を自分たちで見つけて、言葉で発信してきたんです。これは、これから来てるんですね。成功体験。「つくったぞ」、これから来る自尊感情の高まり。「自分はやれる存在なんだ」、「できるんだ」。そして、それに向けて自主的、自発的な活動に動機付けられていくんです。これから自然に出た言葉なのです。

なので、いいですか、ここ大切です。教師の役目、これを見逃さないことなんです。ついつい、「いや、無理だ、無理だ」とか、「いや、先生、疲れたからいいんじゃないか」なんて言ってしまったならば、せっかくこんなことを出してくれたのに、ダメにしてしまいますよね。拾い上げるんで

すよ。共感。「そうだね。花壇、もっとあれば確かにきれいだよな」、「展望台。うーん、白いけど汚いな。きれいにしてみるか」。そうすると、ますますこの気持ちが高まって、「やりたい」となるんですよ。ですから、今回のテーマにもあるんですけども、子どもの力をみとってあげて、それを引き出す授業へと発展させていくんです。

これで気づいたのが、今、NHKの朝の連ドラ「マッサン」ってありますよね。そこに、鴨井商店の大將がいますよね。堤真一が演じてますけれども、その大將の口癖、分かりますか？分かる？「おもしろい。やってみなはれ」。実際、本当の実際の人物、サントリーの創業者も、鳥井信治郎という方なんですけど、常にそう言ったんだそうです。「おもしろい。やってみなはれ」。そう言われたほうも、「見とくんはなれ」と言ったんだそうです。これ、いいですよ。つまり、「おもしろい」というのは「共感」ですよ。何か企画を出す。「おもしろい」、「いいね」。「やってみなはれ」、「やってみようよ」。そう言われたら、さっき言ったように「見とくんはなれ」、「見てください」。

そこで、我々の支援が入るんです。支援しながら提案をしていくんです。教師は。例えば、この続きに、こんな掛け合いがあったんです。「じゃあ、花壇、あといくつ作ればいいかな」と言ったんです。子どもたちはいっぱい作りたいから、「5つだ」、「6つだ」って言うんですよ。「ほお。そうか。でも、みんな、展望台もきれいにしたいんだろ？」、「そうか。そうか。じゃあ、2つだな」って、気づくんですよ。「ああ、それはちょっと無理かな」、いっぱい作りたいけれども。前、作った子たちです。ですから、また、「じゃあ、2つ」。「ああ、そうか。じゃあ、そうしたら4つになるね。2つと2つで4つだね。もっときれになるね。いいんじゃない？」。これが、共感して、支援して、提案なんです。そうして、持続可能な開発のための教育へつながっていくんです。

実際にやった活動を見てください。パート2。今度は大々的に起工式、こんな儀式もしました。これも、子どもたちのアイデアなんです。「始める前、何かやってみない？」。子どもは「土、土」、「山」だど。何か分かんなかったんで

すが、土で思い出したのが、よく地鎮祭で、こうやって山盛りの土をスコップで掘るでしょ？こうやって。「そうか」。で、「これか？」って言ったら、「そうだ」と。そして、こんな起工式をやることになったんです。地区の会長さん、市役所の方、子ども代表者。

そして、新しい花壇作りを始めました。今度は、八角形が少しいびつになったので、こんな水平器なども置いて、本格的な作業になったんですよ。見てください。花壇、増えたでしょ。これが前の花壇2つ。左右に1個、2個。広がったよね。とってもきれいになりました。そして、展望台のペンキ塗り。これも地域の方がたくさん応援に来てくれました。ちなみに、こちら辺にもたくさんいるんですね。こんな感じでパート2、やり遂げたんです。ますますの達成感、成就感、子どもたちは味わうことができました。

そして、もう一つ。これが全員での記念撮影です。この「記念碑の除幕」ってあるでしょ？これも子どものアイデアなんです。作り終わったら、何か子どもたちがこんなことやったと。テープカットみたいな。見てるんですよ、今、ニュースとかで。「ああ、なるほどね。作ったら、何か記念になるもの、そういったものがほしいね」ということで、この記念碑を建てて、除幕式をやったんですよ。テープカットじゃないんですけど、幕を降ろして、この記念碑が出てくるんです。これも、会長さんとか市役所、子どもたちが出てきます。

さらに、完成を祝う会。これは、地域の方がごちそうしてくれました。芋の子汁を作ってくれて、上まで運んであげて、子どもと一緒に食べました。「乾杯！」、子どもたちはジュースです。私たちもですけど。ここに私います。こんな感じでみんなと一緒にカットをして、パート2も無事終わったんです。

そして、これで終わりですけど、おまけ。次の年、「さあ、何をやるのか」。子どもたち、もう考える必要なかったんですよ。実は、隣の活動地区のセンターから、この花壇作り、見てたんですね。「ぜひ、うちのセンターの南に花壇作ってください」、お願いが来たんです。子どもたち、「い

いよ。やるよ」。もう、うれしいんですよ。「俺はできるんだ」って思ってますから。そして、作ったんです。今度はこういった長方形の広い花壇です。この写真は何かという、寄贈式です。子どもたちが作って、お渡しします。恐縮してますよ。「ありがとう」。で、こういった看板も作りました。そこでみんなで記念撮影です。

つまりは、認めてくれる地域の社会的な環境の人々が広がったんですよ。ですから、さらに子どもたちの価値観、やりがい、生きがい、それが高まって、自己実現のさらなる高まりになったわけです。これがESDという持続可能な開発、または発展のための教育だと私は思います。なので、特別支援教育は、すでにこういう活動はやってますよということの紹介です。どうも、ご清聴ありがとうございました。

会場：(拍手)

司会：どうもありがとうございました。お話にありましたように、実は、学校教育の中にESDは入っていて、独自性ももちろん、指導要領の中にも入っていると。意識しているか、していないかは別として、そこにもう先生は携わっているということと言ったと思います。非常に分かりやすい、特別支援の中ではもう、非常に個に応じた教育というのを実践しているわけですから、それが非常に明確に分かったんじゃないかと思います。

それで、これからは質疑応答を進めていきたいと思いますが、まずはどなたかこの内容について質問とか、何かコメントとか、そういうことがあれば。学生さんたちもぜひ何か聞いてください。

質問者1：小学校で4年生の担任をしていて、ESDを、総合的な学習の時間の中にまさしく取り入れている最中です。課題から解決の流れというのが、お話の中で3回ぐらい見えたと感じました。

最初は「花壇をきれいにしたいな」という課題、さらには、花壇から「クローバーの緑を増やしたい」という課題が新たに出てきて、次には、それが「ペンキ塗り」というふうに、課題がだんだん

つながっていくというところが非常に素晴らしいと感じました。

その「環境を整えた」というところですが、作業場を整えられている中で、子どもたちの「こうしたいな」とか「ああしたいな」というつぶやきもしあったら教えていただきたいと思います。

というのは、クラスで、自分たちが活動をする中で記録をとるシートを、僕のほうからどんどんつくって渡してたんですけれども、先日の学習の中で、「こういうシートにしてくれ」という要求が子どもたちのほうから上がってくるようになったんです。そういう子どもたちの変化というのが流れの中でもし見えていたら、教えていただきたいのですが。

谷村：課題解決に向けている過程の中で、その課題が発展して、さらなる課題が出てきた例ですね。この中でも「クローバー」というのは、最初は入ってなかったんです。つまり、「花壇を2つ作るよ」。そして、作っていく中で、子どもたちが自然に「なんか、周りが寂しいな」、気づいていったんです。で、気づいてきた中で、「緑がほしい」。で、子どもと話をするうちに、「クローバー」。「じゃあ、種まけばいいね」。そして、まいたんですね。

ですから、やはり、子どもたちの声を拾い上げる。拾い上げていきながら共感をして、「できない」じゃないんです。まず、やってみるんです。緑にするためには何がいいのか、やれるものをいろいろ考えるんです。その中でこちらから提案していけばいいので。それ以外には、さっき言ったように、起工式、それから除幕式、そういったものもあります。これは活動の中に考えてなかったんですが、それを入れることによって、市役所とか町内会の方も一体になれたんですね。その上では、「確かに大切だね」と思うんです。

あとは、自然発生的に「パーティ」というのも出たんです。パーティしたい。出来上がったので「完成パーティ」。でも、「山の上で芋の子汁を作って食べるのはちょっと難しいな」と思ってたんですよ。それで、「みんなで作ってパーティやる?」、「うん」。「作る材料、道具ある?」、「山だ

からない」。ないですよ。「やりたいけど、どうしようか」。そしたら、そういった話を地域の方が小耳に挟んだみたいで、「パーティやりたいんだって？やるよ」となったんです。向こうから提供してくれたんですよ。芋の子汁とか、あいうテーブルとか、ビニールシート。

そういった形で発展したんで、こちらとしてはやっぱり、「やりたい」という気持ちをすぐには無下にはしないで、投げかけながらやれる方向に持っていく、そういった進め方を常にしています。ですから、子どもたちは満足なんです。地域の方がいっぱい参加してくれたんで、余計に。

司会：2回目の花壇を作った時に、水平器を使ったりとか、それは子どもたちの要求として、もっときっちりつくりたいとか、そういうことが出てきたんでしょうか。

谷村：はい。この『蝶ヶ森通信』の最新号のところにも書いたんですが「八角形の花壇のつもりが、少しいびつな形になってしまいました」。お母さんたちも見に来るんですよ、こういった通信を見て。「わあ、どんなふうに作っているの？」、「やっぱり、ちょっと、形、格好わるいな」。それが子どもたちの耳に入ったんだと思うんです。なので、「今度は格好いい形、作りたい」。どうしたらいいのかということで、平らにするために、私も分かっていたことなんですよ。「こういった材料が必要なよ」、「使おう、使おう」、そういった感じで使うようになったというように。ですから、きっかけはこれですね。少しいびつになってしまったという、それが子どもたちのまたやる気につながってきています。

司会：それがエンパワメントになったということですよ。ありがとうございます。何か他に。

質問者2：この花の種類とかはどうやって決められたのかなとか思ったのですが。

谷村：ここにある写真の花壇は、パート2のほうの花壇なんです。パート1のほうは、子どもたち

が自分たちで種から苗を作って植えたんですが、パート2は、今度は市役所の方が「花苗を提供する」と。それで、「どんな苗がほしいですか」と聞いてきたんですよ。で、子どもたちと図鑑とかいろいろ見て、苗を探して、例えば赤と紫とか、赤と黄色とか、映えるような、こういうきれいな苗に決めました。パート2は10月の初めぐらいの活動だから、ですから、秋に長く残るようにという花。それも、子どもたちと決めました。

質問者3：先生のお話を伺う中で、本人たちに働きかけ、一人一人の子どもたちに対しての働きかけによる力の引き出し、認めることだということだと思うんですが、お話の中で私自身がイメージをしづらい部分がありましたので、教えていただきたいと思います。

子どもたちがみんな喜んでいたりとか、生き生きとしていたということで、多分、一人一人の力を引き出す、認めるという部分については、相当準備もされてこられたであろうし、また、この作業をする中でも、一人一人に対してのアプローチや、持続させるためのアクションに関しての部分、なんらかの仕掛けという部分、もしくはきっかけとかいう部分を、先生方は多分準備されていたんじゃないと思いますが、その点を教えていただけますか。

谷村：個々に応じた指導というのは、特別支援教育は非常に大事にしている、個々の能力に応じながら、状態に応じながら、それができる状況というのをつくっていくんです。でも、やはり、障害の重い子どもさんもいるんです。そうすると、個人差が結構あるので、均一に同じ活動をやるというのは難しい。そうした場合には、活動内容でも、子どもたちに合わせて手段を変えていくんです。

例えば、この子、非常に障害の重い子どもさんなんですが、この子は「花壇作りグループ」なんです。つまり、土を掘り起こしていい土にしています。花壇杭を並べるのは非常に難しいんです。なので、この子にはこういったパンの中にとった土を入れて、ここから葉っぱだのを取りましょう、と。そうすると、この子はここに集中できるんで

す。ですから、他の子も土を耕すとか掘り起こすという作業、同じ内容なだけけれども、活動の場とか、それからやり方を変えて、参加できるようにしたんです。ですから、こんな感じで個々に応じた活動内容をいろいろ取り入れました。

あと、もう一つ、フラフープを持って行って、それを地面に置いたんです。「あなたの作業する場所はここだよ」と。で、フラフープの中に入って、その中を一生懸命、土を掘り起こすんです。そうすると、多動的な子どもでも、自閉的な子どもでも、自分の見通しが持てるんです。「ここをやればいいんだ」と。で、ここを終わったらば次ということで、フラフープの場所を変え、またフラフープの中に入ってそこをやる。「この中やろうよね」って。で、この中を一生懸命、草を取ったりしてやるんです。こういった感じで個に応じた支援をその場に應じて。

質問者4：親へのフィードバックは、先程、「通信」ということでしたけれども、それ以外に、この子どもさんたちの活動をどういうふうに、支援されている方、教師の方がフィードバックされているのかをお願いします。

谷村：保護者への連携のあり方、そしてフィードバックの方法の一つは今言ったように、学校が中心になって、活動内容を非常に視覚的に、文字で、写真で知らせることなんです。あとは、登下校の時に、保護者が子どもとともに学校に来た時、それから迎えに来た時に、担任が直接話します。その中で、実際に教師の言葉でも伝えていきます。そうすると、大勢の方がより実感するようになります。「本当に頑張っているんだね」と。ですから、そういった配布物だけじゃなくて、言葉がけ、言葉のやりとり、そういったものを心掛けています。

司会：今のお話だと、例えば保護者の方のエンパワメントというか、そういうことにもなっていくんでしょうか。何か具体的にそういうことってあるんでしょうか。

谷村：ええ、なっています。つまり、子どもの発

見ができるんですよ。こういった活動を知ってもらうことによって、見てもらうことによって、今まで見たことがない子どもの姿から保護者が発見して、そして、「やれたんだ」、「できたんだ」。それが自分に返って、保護者もエンパワメントされる。そういった感じで、保護者も変容していきます。

ですから、そういった保護者の方は、積極的に展望台まで来て、活動の様子を見てきています。恥ずかしいからと言って、子どもに見つからないように見たりしてくれる保護者もいました。でも、あの229メーター、学校から30分近くかかる山まで来てくれました。それはやっぱり、保護者を動かす、エンパワメントしている部分があると思います。

質問者5：私自身が教育実習で小学校に行った際の、総合的な学習の時間の授業についてのことで。私が実習中に取り組むのは福祉のことという計画があったのですが、子どもたちから、別のやりたいということが出てきました。しかし担任の先生から、それはもう別の学年で学習することだからということで、半強制でも、学年での確認でも決めたから、福祉のほうをやってと言われたんですけれども、その時に、谷村先生だったら、子どもに対してどのようにフォローをしますか。

谷村：その場に居合わせていないし、子どもたちの応対とかも分からないのでなんとも言えませんが、やはり、「こう決めたんだからこれをやらなければいけない」というのは、好きじゃないんですよ。計画は計画であっていいんです。でも、実行に移す時には、それを变えてもいいんです。何かやらされると、子どもたちは絶対最後まで楽しんで活動できません。であれば、計画を変えましょうよ。そう思います、私。ただし、やれる範囲でね。あまり無理な変え方をすると、子どもたちも困るんです。特に、自閉症の子どもは、スケジュールが変わると非常に戸惑いますよね。それと同じように、変えるならば事前に知らせて変えながら確認しましょう。そういうことも踏まえながら、計画は変えてもいいと思います。

強制はあまりしたくないです。

質問者6: 私は今年、自分の地元の町で、地区の祭りの役員に関わらせていただきました。そこで「今年は何かしようか」ということで、障害者の方たちと一緒にお神輿というか、それを担ごうという計画になりまして、そこで一緒に活動させていただきました。

そこで障害者の方たちから「このお神輿はどうやってできているのか」とか、きれいいに見せるために柳の枝を切って行って、そこに和紙で作った花びら、花をつけるんですけれども、そういった柳の枝についてとか、お神輿を担ぐ棒も丸太で太いやつとかもあるんですけど、「これはどこの木なのか」とか、すごい、いろんなところを聞いてきて、「すごいところ気がつくな」と思ってちょっと共感できたなと思いました。ありがとうございました。

谷村: ありがとうございます。

司会: 最初のほうに、先生方からのエンパワメントっていうことを入れ込んだ時に、「それはそぐわないじゃないか」というふうなお話がありましたよね。実際、それをやられていくわけですが、その中で先生方の知識と言いますか、何かそういうものというものは変わっていくのか。そのことで、実はもともとやっていることだとは思いますが、何かそのことに気づくことが先生方のエンパワメントになると、そういうことっていうのは実際あったんでしょうか。

谷村: ええ。研究理論が構築されて、実践に移し出されてくると、先生方から「さあ、エンパワメントやろう」と、合言葉のように「エンパワメント」という言葉が使えるようになってきました。そうしたら、最初はその言葉自体にアレルギー反応を示していたんですけれども、中身を知って、子どもに還元できるものだっていうことが分かったら、もう本当に共感して、授業の端々に「エンパワメントするか」、それが自然に出てくるようになりました。

ですから、そういった意味では、教師同士の一体感も増えた。そして、3年間、長いんですよ、3年間って。その長い期間でも研究を進めることができたと思います。ですから、最初の4カ月ぐらい、夏休みが過ぎるぐらいまでは、なかなかまとまらなかった。10月までに理論を構築してくれと言われたんです。なるべく体系化して、で、その辺からやり始めました。ですから、苦労はあったんですけども、やはり、その苦労は報われたと思います。

質問者7: 質問と言うよりは感想なんですけど、このESDを取り入れた活動の話聞いて、南九州大学都城キャンパスは、人間発達学部と環境園芸学科があるので、こういった活動を取り入れていくことで、学生同士の交流が深まるのではないかと思います。また、その深まりを通して、地域の人たちやいろんな子どもたちとの関わりを持てるのではないかと思います。本日はとてもいい経験になりました。ありがとうございました。

質問者8: この一番最後のページなんですけど、『きれいにしよう！蝶ヶ森通信第2号』というのが、19年の6月6日とあって、最終号が6月15日と書いてあるんですけど、この前後で準備をした期間とかはどれぐらいなんですか。10日ぐらいなんですけど、その前後でどれぐらいの準備をされたのかということと、あと、終わったあとに、持続可能な学習ということで、その後の花壇の整備とか、そういうのは誰がされてたのかということと、現在はどのようなことをされているのかということをお聞きしたいです。

谷村: はい。活動期間は、単元の計画では2週間でした。この6月の6日、水曜日、第2号なんですけど、6月の4日月曜から、次の週の6月の15日金曜まで、2週間で活動しました。生活単元学習というのは、毎日、3時間目、4時間目に帯状に組まれていくんです。月曜の3・4、火曜の3・4。ですから、月曜から金曜日まで、3時間目、4時間目の2時間が続くので、全部で1週目10時間、2週目10時間、20時間。ですから、そ

の中で全てやり通りしました。

その後、どうしたのかということなのですが、花壇の整備に当たっては、さっき言ったように体育でミニ登山をしますよね。頂上に登った後に、その花壇の草取りなんかをします。そして、さらに花壇の維持をしてきます。ですから、体育の時間に見てくる、それ楽しみなんです、子ども。「ああ、今日は花壇見れる。どうなってるかな」。そんな感じでやっています。

それから花壇については今も4基あります。そして、周りをきちんと整備するようにしています。常に、春になったら、その4基の花壇の苗の入れ替え、それは継続的にやっています。そして、壊れたところを点検して補修。それはやります。ですから、今も4基、きちんと花壇があるし、柵もあるし、記念碑もあります。結構、暴走族も来るんですよ、バイクで。でも、壊したり、いたずらしたりすることはありません。それを心配してたんですね。荒らされるんじゃないとか。そんなことなく、そういった方々も、子どもたちが作ったものだというのが分かるんですよ。看板なんかから。ですから、そんなひどいことはしない。ですから、今でも壊されずに、そのままの形であります。

質問者9：自分が教師になったような気分で、楽しく聞きました。大学でESDの理論などを習い、実際、教師になって、学校でそれをやっていく時に身に付けなきゃいけないスキルというのがあると思うんですけども、先生の考え、勉強された経験とかを皆さんが勉強して、現場で発揮できたら、ESDが広がっていくと思いました。その中で一番大事な、ESDをやる上で学生のうちに特に考えたり、学んでおいたりしたほうがいいことが何かありますか。これから学生さんたちがESDをやるために何か勉強しておいたらいいこととか、どういう心持ちでそれを勉強していけばいいのか、そういったことがあれば教えてください。

谷村：非常に難しい質問で、教師の資質に関わるような答えになるんでしょうけれども、何度も繰

り返して言う「共感」、「支援」、そして「提案」、これは非常に大切なんですね。共感しないと、子どもたちは「やっていいのかな?」、「先生、実は反対しているんじゃないのかな?」って思っちゃうんですよね。そうじゃないんですよ。共感してあげないと、子どもたちの「やる」という気持ちは引き出せないの、まずは常に子どもに寄り添うこと。子どもと同じ目線で、子どもと同じ立場で、逆に子どもから教えられるように、そういった目線で共感してあげることがまず大切だと思います。ですから、教師は上から目線であってはいけないんですよ。むしろ、教わる立場でいるべきです。謙虚に。それが一つ目。

あとは、支援に当たっては、やっぱり引き出しを多く持ったほうがいいでしょうね。いろんな支援の方法があるので、一つ、二つの方法しか分からないと、「ああ、いいね。やってみよう」と思っても、「どうやっていったらいいのかな?」と教師が迷い、子どもが不安になってしまいます。せっかくやろうと思ったのに。ですから、そのための引き出し。引き出しはある程度、経験値だと思うんです。ですから、10年、20年と教師をやるうちに、引き出しが自然に増えてきますから、多くなりますから、そこを使う。

そして、あとは提案。提案というのは柔軟な心なんですよ。柔軟性がないと、型にはまった提案しかできないんです。「これやってみよう」、そうすると、さっきの女子の学生が言ったように、「もう決まったことだから」、その提案しか目に入らないんです。計画しか。なので、それらを教師は常に頭に入れて、子どもとともに動く。そういったことが大事だと思います。ですから、それを教師の経験の中で磨いていくというか、身に付けていく。

私は現場の人間で、31年間教師をやっているんで、それに近づくまでちょっと時間がかかると思うんですけども、特別支援教育に入って、やっとそれに気づいたんです。それまでは、結構上から目線のところがあったと思います。「教えてやるぞ」、そんな感じで授業を小学校の頃は持っていたと思うんです。それが逆になったと。

質問者9: 自分もそういうことを心がけてやっていきたいと思います。ありがとうございました。

男性教師: 環境教育センターの目的は、身近な暮らしだとか自然だとか、それに対してクリエイトする、創造するセンス、感性を育てるということですね。感性はとても大事じゃないでしょうか。知識、技術もとても大事なんです、雲の流れだとか、夕陽のきれいさだとか、そういうのって毎日磨かないと、その感性というのは何か必要な時に輝かないんだよという話を学生にはしています。

今日、谷村先生のお話、とてもダイレクトな実践で、その実践を展開する理論構築のキーワードというのが、また全体をつくっていったと思います。その中で、地域の公園のことについての陳情というようなことも入っていたし、日常の子どものたちの体育だとか、そういう中で「公園が汚いね」というようなこと、そういうものがだんだんとクロスしていくような、そういうような仕掛けを先生方がしてあって、キーワードのものと結びつけている。それはセンスというか、日常の中の気づき、それを緊張的な実践の中に、あるものを形作る時の栄養素、土台にしているんじゃないかなというふうに思いました。

学校の中に留まらないで、校外で地域の人と一緒に作るというのはとてもダイレクトなことだし、子どもの声に、「共感」って随分言っちゃったけども、小さな声をとっても大事にしている、その意味（の重要性）。言葉がなかなか出ない、言葉で表現できないので、地鎮祭も動作で表現しているのを、「それは地鎮祭ではないか」というふうに言語化して、子どもの隠された表現を形にしていくということですね。子どもたちにある端的な概念、端的なものが形成されるための生活概念というものを、子どもの生活をしっかりさせて、その生活概念を端的な概念にどう移行させるかということで、常に往還しながらしている実践が紹介されたと思います。

ただ、共感とか非常に大事なんです、その子どもと先生と、というか、その子どもの世界にどっぷり入っていたら新しいものはクリエイトで

きないので、そこに何か声を出したり、距離を置くということがとても大事になります。報告の中で「いびつな」という表現がありましたよね。それは水平器とか使って簡単に（クリアできる）、否定的（な表現）なんですけれども、そのことによって新たなことが創造できるのです。どっぷりその共感だけじゃなくて、今後の世界を創り出すためには質問を出して、違ったことを言うことによって、そこで新しいものが創造できる。もちろん、共感というのはベースなんです、その中でどういうふうにして声を出して、反発、反感というか、その新たなエンパワメントをつくるためのそういう仕掛けをするか。「いびつ」だとか、いくつか（否定的な）声を出すというのは、とても重要だと思います。

今日、実際に映像を通して、先生の実践を初めて詳しく聞いて、とても素晴らしい実践なので、学びが多い時間を過ごせたなと思いました。ありがとうございました。

司会: 今、私も（質問者1の）K先生の総合の学習に関わっていて、そこで子ども達は毎回探検に行ってそれを記録するんですけど、その記録用紙を、もっと使いやすいように形を変えてほしいと、自分たちから担任の先生に声をあげる。それから、沖縄で長年、小学生の総合の学習に付き合っているんですが、そこでは野鳥観察をして、鳥の図鑑で調べていた。でも、子ども達の方から「もうこれ使いにくいから、自分たちで図鑑つくる」って言い出して、それで、もっと分かりやすい、自分たちで絵を描いて図鑑を作り出して。

だから、ある意味、「追い込む」ことで、必然性というのがそこで出てくるのが大切だと思います。それはいまU先生がおっしゃったように、ちょっと否定するようなことになるかもしれない。でも子どもたちにとって、結構そのことが、逆にエンパワメントになるんだなというのを、また改めて感じますね。

質問者10: ふたつほど質問を。ペンキを塗るという話で、多分、高所作業になるんじゃないかなと思うんですけど、その高所作業を子どもたちに

させるとなった時に、どのような工夫をされたのかなというのがまず1つです。それと、いろんな作業をしていこうという呼び掛けをした時に、必ずしも子どもたち全員が「やりたい」と思ったわけじゃないかなとは。やっぱり、子どもたちも人間なので、「ちょっと面倒臭いな」とか、「やりたくないな」とって思う子というのもいると思うので、その子たちをどう「一緒にやっていこう」という心の切り替えというか、モチベーションを上げる、その働き掛けはどのようにされたのかというのを教えてください。

谷村：展望台の一番高いところは、やはり子どもたちでは少し無理です。なので、子どもたちは下、この柱、こういったところを中心に活動することにしました。上が地域の方々や、我々教師でやると。ですから、その子たちは「下は無理なんだよ」ということになってきます。

あとは、全員がやりたいと思えるわけではないので、「塗る」という活動の他に、「はがす」という活動を入れてあります。つまり、ペンキがこうはがれてますよね。そこをはがすのが好きな子、いっぱいいるんです。バラバラバラと、こう、はがすんです。ですから、その子たちははがす。はがし終わったところに塗る。こういった形でやるわけです。ですから、ある程度、ほとんどの子どもたちがどっちかの方法でちゃんとできました。

質問者 11：やっぱり、自分も自然はすごい重要で、大切にしたいほうがいいというのは考えるんですけど、子どもたちをESDで教育していくために、教育者、指導者の中で…もうひとつ意識を広めるにはどうしたらいいのかなっていうことを聞きたいです。

谷村：前段でも話したように、この時にはESDを意識した教育ではなくて、普段の生活単元活動の実践の中の教育なんですよ。ですから、我々は常にESDというのが頭になくてもやっていったんですが、つまりは子どもたちの願い、それから課題解決に向けて、教師も一体となってそれを共有してやるという一体感は、教師自身、全て持つ

ているんです。

そういった一体感というのは、附属特別支援学校って強いし、研究校って強いんです。「みんなで行こう」、「子どもたちのためにやろう」と思うと、さっきのエンパワメントの取り上げ方じゃないけども、初めはアレルギーを持ったとしても、一度「やる」って決めたらばとことんやるという。そういった状態でやっているから、もうESDの実践というのじゃなくて、この実践に向けて一体感で取り組んだ授業です。

ですから、あとは、あ・うんの呼吸でやれるようになりましたね。そういうふうにやりました。そんな答えでいいですか。

今日は特別支援の話、どうもありがとうございます。本当に教育に生きる話をお聞きすることができました。どうもありがとうございました。

環境教育講演会 "M-CAFE 8"



子どもの力を見取り、引き出す授業

～ 特別支援教育におけるESD実践に学ぶ ～



講師：谷村 佳則 南九州大学・人間発達学部/講師 特別支援教育

日時：2014年 12月 13日（土）13:30～15:30 [13:00開場]

場所：南九州大学 都城キャンパス 本館4F 小児保健実習室
宮崎県都城市立野町3764-1 電話:0986-21-2111(代)

入場無料（当日受付可）

主催：南九州大学 人間発達学部附属 環境教育センター

